

と記し、新唐書同傳にも

德宗立、使中人告喪、且修好、時九姓胡勸可汗入寇、可汗悉師向塞、見使者不爲禮

と記せり、此の前年(大曆十三年)回鶻の軍は既に太原に寇し、侵掠を擅にせしを、纔に張光晟の防戦によりて退くるを

得たりしなれば、此の年代宗の喪に乘じ、遂に可汗親から師を率ゐて大舉南下を企つるに至りしは、自然の勢と解すべきが、此の際尙注意を要するは、新たに立ちし德宗と、牟羽可汗との關係なりとす、德宗の立つや、上述の如く使を回鶻に遣して舊好を修めんとしたるは明かなる事實なれども、此の如きは只當時の形勢上止むを得ざるに出でたる政策に過ぎず、帝は嘗て陝州に於て蒙りたる凌辱に對し、深く牟羽可汗を恨み、(二〇〇)機を得て之に報ぜんとしたるものなれば(後述參看)、牟羽可汗の南下は、實に又此の關係に基く所多かりしものにして、唐書回鶻傳に牟羽可汗に繼ぎし頓莫賀達干が、唐に和親を請ふや、德宗の之を退けんとしたる有様を記して

回鶻「使使者獻方物、請和親、帝蓄前患未平、謂宰相李泌曰、和親待子孫圖之、朕不能已、泌曰、陛下豈以陝州故憾乎、帝曰然、朕方天下多難、未能報、且毋議和、泌曰、辱少華等乃牟羽可汗也、知陛下即位、必償怨、乃謀先苦邊、然兵未出、爲今可汗所殺矣云々

と曰へるものは、好く此の間の消息を語れるものなりと曰ふべし。

偕て此の南下の計畫は舊唐書に「舉國南下、將乘我喪」と記し、新唐書に「悉師向塞」と記せるより考ふれば、其の規模の頗る大なるものなりしことを想像するに足るべく、こゝに述べたる南下の理由と、當時に於る唐と回鶻との國勢の相違とを併せ考ふれば、此の計畫にして實現せられしならば、その結果の史上に残されしもの、決して